

尔·鹿子

鹿子



2月号

鈴鹿呂仁
拾掬集 その五十三



日を返す海峡は見ず冬の蝶
祖国へと執着の旅冬の蝶
冬蝶の翅の覚ゆる夢ひとつ
強かに混濁の世へ冬薔薇
妻の愚痴一つ加へておでん鍋
おでん煮る赤提灯の揺れどほし

撫で肩の男のそびら京師走
神丘に冬日の零るなだら坂
社家並ぶふくら雀の遊びぐせ
鴨川の陣を乱せり都鳥
爪紅の別れの河畔ゆりかもめ
川涸れて出町柳の別れ橋
小事軽んずこと勿れ初日記
初夢のライン七人福を持ち

近詠

枯れ

鈴鹿 仁



枯かづら引けば鬼山童話めく
表門の社家ゆるぎなし冬構
枯るる音耳にやさしく神まゐり
風呼むで月日の想ひ冬すすき
雀きて枯木のいろに飛び翔けり

近詠

藪柑子

和田 照海



焼討の火種は今も藪柑子
総門を入れば背後の添水かな
陣鐘の渡る淡海や水の秋
綿虫や靴をそろへて川渡し
看板のはんざきに訊く蕪蒸

松本 鷹根



塩貝 朱千

鐘 余 韻

鐘余韻 十夜説法長長と

遙かなる沖の光芒初時雨

浮寝鳥湖北は夢を浮かす雲

初時雨町を平らに鳥轍す

短日の影を惜しみて野辺巡る

近 詠

どんでん返し

枯蔦に首撫でらるる明智藪

下知状のどんでん返し紅葉散る

妻子とて戦ひに散る白山茶花

風に狂はば発火しさうな紅葉山

首塚や白紙に包む椿の実

英華採集

四分の一の白菜ものがたり

千葉 上野 紫 泉

白菜は冬の季語であり、白菜と言えば鍋料理であろうか？主となるのは他のお肉、お魚の類となるが脇役陣を代表するもので、大人数で囲むお鍋は、楽しいが独り身では味気ない限りである。「四分の一」とは、白菜一つを少人数用として切られたものである。家族の数が多ければ一つを買うが、四分の一でこと足る生活の侘しさ寂しさを白菜を喩えとし「物語」としたところにこの句の面白さがある。省略を効かせた表現に巧みさが光る。

一引けば山動きたす烏瓜

福知山 古 旗 みさき

烏瓜の蔓は、まるで実を守っているかのように縦横無尽に張り巡らしている。それは、一山の均衡を保つように仕向けられた自然の摂理なのかも知れない。「一引けば山動きたす」の措辞は、烏瓜の蔓を引けば実が現れることに繋がってくる。この句も巧みな比喻と季語を取り合わせた結果の二物衝撃の成せる技である。

不揃ひの針目につるべ落としかな

宮 崎 福 永 光 子

「寄る年波には勝てぬ」という諺があるが、年を重ねていくと今まで出来た事が出来なくなる事が多々ある。「針目」は、針を使った手仕事か、着物の仕立て仕事であろうが、思うように縫えない原因は視力低下もあるが多分に手の運びがスムーズに出来ない事もあるだろう。「つるべ落とし」の季語に作者の遣る瀬無い思いが十分込められている。

朴落葉 藤岡紫水

一つ灯の四方に影あり冬座敷
山眠る築四百年の城を乗せ
秘めてこそ昂ぶる思ひ寒椿
山茶花の闇よりぬつと宵の月
月光の重みに朴は葉を落す

早春 沼田巴字

早春や新作菓子そろひしよ
水音を楽となしけり梅の里
ひな段を眺める如し梅の村
煮凝の一對の眼の王者ぶり
煮凝やゆれて間遠になる夫婦

星月夜 丸井巴水

髭剃つてみても老い顔チチロ鳴く
流れ星袈裟懸けメスの痕薄れ
縁故なき人とベンチで紅葉褒め
手鏡を曇らす吐息小望月
潤む目で栞挿し置く星月夜

年の暮 植村蘇星

秋高し委細合点遠こだま
同心円ならず落葉の風まかせ
今日ひと日一日を全う年の暮
硬軟に生かされ生きて年の暮
よなよなの備忘録繰る年の暮

雪比叡 北川孝子

比叡路のくぼみの夕陽冬深む
ひとつ灯の殊にいとほし霜月夜
日暮れ黄葉うなづき早き友とぬて
落葉踏む自答は己れ責むことも
過ぎ去ればみな些事ならむ雪比叡

木守柿 高木晶子

七十五日やうやく過ぎし孔雀草
御持仏のうすくらがり桐一葉
白菊を供へ一助の時を得る
木守柿一部始終のよく見えて
ちちははに行きつく話土瓶蒸

余白 直江裕子

鱗雲わたしが異端だつたころ
大輪の菊どこ撥れば笑ふ
コスモスの余白はすべて母の空
象の背を砂もて洗ふ秋の暮
冷ゆる日は命のしまひ方などを

冬薔薇 伊藤希眸

回診の白衣のうなじや木の葉髪
山の容ちに紅葉彩づき猿渡る
雁の声天へ広げる倭棲み
短冊にかすれる墨や冬薔薇咲く
一畳の絨毯恋の成就きく

シャボン玉 奥田筆子

シャボン玉大人の話の中に入る
物の種記憶どこかで前後して
あれがひと裸木のやうなアウシユビツツ
悲しみは去りぬマントのやうなもの
切手とは翼なごりや鳥帰る

鬼子母神 井上菜摘子

エプロンをはげせば蕪の重いこと
屏風絵やふりむく者のなき戦
鬼子母神雪また雪ふる淡海かな大津三橋節子美術館三句
うしなひし右腕の聴く秋の詩
小春日のたれが弾いてもよいピアノ

風邪心地 村田あを衣

逆臣やもみぢいちまい裏返す
発心は明智の御魂冬木の芽
落しても割れない鏡寒日和
円満の秘訣りんごの剥き上手
安珍の鐘はからつぽ風邪心地



通巻二百号の画像



京鹿子集

鈴鹿呂仁選

饒舌に手足付けたり新走

京田 山中志津子

句読点増やして風の吾亦紅

草の花迷ひ径とは知りもせず
短日や庭師の残す高梯子

城陽 鷺山 珀眉

零余子飯昭和のフィルム巻き戻し

シヤガールの青い馬跳ぶ冬銀河

独演のラストステージ銀杏降れ

ななかまど吾も燃え尽き症候群

雁渡る恩ある人を又増やし

鈴生りの私の時間ピラカンサ

京都 片山 熙子

追慕しきり花野大きく傾けて

晩秋の蜘蛛よ空欄埋められず

カフェオレのハートの滲み秋うれひ

雁渡る令和の空は自在なり

初霜の便り列島を南下

柀やふつと言葉が匂ひたつ

柿落葉細身の人に径ゆづる

やはらかき陽を溜めてをり冬の柿

合意なき決定とやら初霜降る

バームクーヘン秋思の穴の大きくて

校訓を刻みし石碑こぼれ萩

福山 亀井 福恵

去る人に鈴虫は鈴こぼしけり

古九谷の深き丹の色秋のこゑ
びいどろの花瓶の灯影星月夜

大曲りして名の変る街小春

秋のこゑ薬師如来の薬壺

風騒の扉開けば花すすき



風の声は衣摺に似て三保の秋

福知山 西村 白籽

鬼が火を吹き出すもみぢ大江山

鴨一つ翔てば百翔つ川明り

京都 菊池 和子

言の葉は緩きカーブや冬ぬくし

切干や元に戻れと言はれても

初霜は天のふりかけ千枚田

父が手を貸す歩き初め秋うらら

切干や元々わたし役者なの

うしろより切干日暮ひき寄せ

詩心は語り尽せぬ草の花

柿落葉かがやく命保ちをり

黄落やひとりぼつちになる序奏

秋思ふとしめりだしたる五臓腑

一本のもみぢと私語の増ゆ日暮

黙深し海馬ちりちり黄落期

ふところの冬めく兆し流離なる

綿虫や鳥辺野はやも日の翳り

鳥瓜の秘め事風に陽に弾む

大 阪 本郷 公子

高 槻 安田 優歌

四分の一の白菜ものがたり

習志野 上野 紫泉

鴉末に鳴くや珈琲温める

月の舟帯とく母は往くとゆふ

百八段見上ぐ眼に青鷹

一引けば山動きだす鳥瓜

福知山 古旗みさき

風紋の日ごとに深し秋の声

鯛雲わが猫もあるあの辺り

おのづから語る身の上秋遍路

不揃ひの針目につるべ落としかな

宮崎 福永 光子

甘藷掘る三人よれば国なまり

秋草や十人十色にある主張

どんぐりと昔話の中にある